

〈原 著〉

小林 隆児*

自閉症のことばの成り立ちを考える (第2部) 幼児期編

児童青年精神医学とその近接領域 44(1):38-48 (2003)

これまでの自閉症の言語認知障害研究を批判的に捉える中で、筆者は関係障害臨床の視点から自閉症のことばの成り立ちについて検討を試みた。第2部の本稿では、自閉症の幼児期にみられることばの特徴としてよく知られている常同反復的なことばや主客転倒と類似した現象を取り上げた。その中で、従来指摘されてきた自閉症の特異な言語発達像は、けっして自閉症特異的なものではなく、コミュニケーション発達過程において、いわば必然的に認められる現象であることを示した。そして、そこにおいてわれわれの関与のあり方が、自閉症の人々のその後の言語発達過程に大きな影響を及ぼす可能性について論じた。さらに、自閉症児の言語発達を関係発達論的観点から捉えることによって、彼らのことばを、言語発達病理像とみなす視点を越えて、建設的なコミュニケーション発達の一過程としての言語発達の特徴として描き出した。

最後に、これまで自閉症の言語認知障害研究が、本来生きものとしてのことばを、関係性や文脈と切り離した形でもって採り上げてきたことを指摘し、これまでの死に物の現象に関する科学から脱皮し、生き物の科学を志向していくための新たなパラダイムを求めていかなければならないことを主張した。

Key words : affective communication, attachment formation, autism, context-based expression, repetitive expression, reversal pronoun

目 次

- I. はじめに
- II. 臨床事例による検討
 - 1. 関係障害臨床からみたことばのもつ多義性一同じことばを繰り返すことー事例 A男
事例の考察
 - 2. 関係障害臨床からみた主体と客体の関係ー主客転倒は個の病理的現象かー事例 B男
事例の考察
- III. 全体の考察ー幼児期自閉症のことばの成り立ちについてー
 - 1. 子どもの発することば(発声)と養育者の表意
 - 2. 情動的コミュニケーションと映し返し
 - 3. 関係障害における意識と体験の乖離
 - 4. 養育者の果たす役割ー養育者の成り込みー

- 5. 自閉症児のことばと関係障害臨床
- IV. おわりに
- V. 文献

I. はじめに

これまでの自閉症の言語認知障害研究を批判的に捉える中で、筆者は第1部(小林, 2003)において、関係障害臨床の視点から青年期・成人期自閉症の言語認知発達像を再検討した。そこで筆者は、青年期・成人期自閉症にみられる特異な言語発達病理現象とみなされてきた遅延性反響言語、隠喩的表現、および字義通り性を取り上げながら、それらの表現形態は、けっして病理的という一面的な捉え方をすることはできず、コミュニケーションの発達過程からみていくと、このような表現形態はある意味では必然

*東海大学健康科学部社会福祉学科
e-mail: ryuji@is.icc.u-tokai.ac.jp

的ともいえるのではないかの試論を展開した。

従来の自閉症の言語認知障害研究が、個体能力論的発達観にもとづく自閉症の言語発達障害像を抽出してきたのに比し、筆者は、関係障害臨床の経験を通して、関係論的発達観（鯨岡，2001）にもとづく自閉症の言語発達像を描き出し、そこにおいて、コミュニケーションの一方の当事者であるわれわれの関与のあり方が、コミュニケーションの成立過程に深く関係していることを、これまでの議論を通して主張してきた。

ただ、第1部の論考からは、青年期・成人期自閉症にみられる言語臨床像が、コミュニケーション発達過程の中での過渡的現象であることを積極的に支持するものとはいまだなりえていない。それはなぜかといえば、関係障害臨床の立場からの介入によって、その後のコミュニケーション発達の様相を確実に把握しきれていないという限界性があったからにほかならない。そこで本稿では、自閉症にみられる言語臨床像が、コミュニケーション発達過程において、過渡的現象としての積極的な意味を持っていることを実証的に論じるために、幼児期自閉症を対象とした関係障害臨床の経験を取り上げてみようと思う。臨床素材は Mother-Infant Unit (MIU) (小林，2000) における治療例から採取されている。呈示された事例はすべて国際診断基準により自閉症と診断されている (American Psychiatric Association, 1994; World Health Organization, 1992)。

幼児期自閉症にみられることばの成り立ちを検討する前に、本稿を論じる上での前提として、いくつか確認しておきたい。

第一に、ここで取り上げた知見は、筆者の依って立つ基盤である関係障害臨床の視点から母子の関係障害への介入によって、明らかになった母子コミュニケーションの様相としての自閉症児に認められた言語表現であるということである。第二に、取り上げた事例は、すべて治療初期にもっとも問題となる自閉症児にみられる愛着をめぐる葛藤に焦点を当て、その後の介入によってこの葛藤が緩和されている。ここで示

される知見は、その後の経過の中で捉えられた母子コミュニケーションの様相から抽出されたものである。

なぜこのようなことを改めて確認しておくかと言えば、活字のみで表現すると、一見同じようなことばの使用にみえても、実はその場の母子間の愛着形成の質的相違によって、二者間の情動的コミュニケーションの有り様が大きく異なるため、そこで発せられていることばの果たしている機能にも大きな差異が認められると考えられたからである。生きた言語を対象とする際に、このような接近方法は欠くことのできないものといえよう。

これから本論に入るが、ここでは自閉症に特徴的とされてきた言語発達病理像としての常同反復的表現、主客転倒などと表層的には一見類似したことばの使用に焦点を当てながら、幼児期における自閉症児のことばの成り立ちを検討する。

II. 臨床事例による検討

1. 関係障害臨床からみたことばのもつ多義性—同じことばを繰り返すこと—

同じことばをさまざまな文脈で繰り返し用いることは、自閉症にはとてもよくみられる言語病理現象である。ことばや行動の常同反復性は自閉症の診断基準である三大症候の一つにもなっている (American Psychiatric Association, 1994; World Health Organization, 1992)。このような言語発達病理は、たしかに自閉症児の言語獲得の困難さを示していることは確かであるが、関係障害臨床の視点に立ってみると、新たな側面がみえてくる。

事例 A 男 治療開始時 3 歳 6 カ月

〈知的発達水準〉 DQ50 (津守式発達検査) 中等度精神遅滞

〈発達歴〉 満期正常分娩にて出生。身体運動発達は正常。10カ月、「パパ」「ママ」と発語が認められたが、それ以後ことばの発達が遅れた。指さし行動は1歳前から見られたが、他の同年代の子どもに比べると非常に少なく、欲しいも

のがあると親の手をとって要求することがほとんどであった。人見知りも乏しかった。パズルやブロックのひとり遊びを好み、呼びかけにも反応が乏しかった。1歳半、某医大にて聴力検査を受けたが、異常はなかった。

3歳、幼稚園に入ったが、集団行動がとれず、退園を促されやめた。この頃、母親は育児に不安が強く、しばらく母子一緒に実家に帰っていた。そこで親戚の人から自閉症ではないかと指摘され、近医を受診し、自閉症と診断された。まもなく当院を受診し、MIUに導入された。

〈治療経過〉治療初期、A男は視線を合わせず、治療者が近づくと逃げるなど、回避傾向が顕著であった。両親はA男の気持ちを感じ取ることが難しく、一方的に働きかけて子どもをなんとか遊ばせようとするが、その促し方は子どもの自立を促すような行動が目立っていた。A男はこのような両親からのやや強引にみえる働きかけから逃れるようにして、クルクルスロープ(傾斜したスロープを左右交互に車を走らせて楽しむ遊具)で一人黙々と遊んでいた。次第に両親は積極的な働きかけを控えるようになると、A男はさりげなく両親を誘って一緒にクルクルスロープで遊ぶようになった。A男はその後しばらくクルクルスロープに夢中になっていたが、そんな彼の姿を見ていた母親は彼の行動を自閉的で強迫的なこだわりが強いと筆者に悲観的に語り、なんとかこのような癖がなくならないかと願っていた。そんな思いの強い母親であったので、どうしても他の遊びにA男を誘わずにはいられなかったのは当然のことに思われた。

しかし、3回目、一見クルクルスロープを常同反復的に繰り返しているだけと思われがちなA男の遊びにつき合ってみると、彼なりに工夫して遊んでいることが分かってきた。たとえば、床の上にクルクルスロープを置き、自分は机の上から眺める、そうかと思うと、斜めから眺めてみる、といったように眺める角度をいろいろと変えて楽しんでた。筆者はそのことを両親に伝えた。やがて、両親のA男の行動に対する見方が少しずつ変化していったからであろう

か、彼の遊び方に感じられていた強迫性は薄まっていくとともに、父親に車を持たせて、彼の合図でスロープを転がり降りる車の動きに合わせて、A男も滑り台を滑るなど、彼自身で編み出した新しい遊び方を織り交ぜるようになった。このような創造的な遊びを目にして両親も一緒に遊ぶことを多少なりとも楽しめるようになっていった。すると、それまで他の遊びをしていてもクルクルスロープに舞い戻っていたA男が、5回目頃からしばらくひとりで遊んでは母親のもとに舞い戻って、まわりつづくようになった。

治療初期のA男は「バイバイ」以外に発話らしい発話がほとんどなかったが、母子間の愛着関係が深まり、7回目、A男はさまざまな場面で「アンヤ、アンヤ」という甲高い声で何かと自己主張するようになった。当初、母親は「何をしたいの?」、「どうしてほしいの?」、「アンヤじゃ分からないでしょ」と苛立っている様子であった。彼の「アンヤ」と繰り返される発語は、相手へのなんらかの要求、喜びや嬉しさの表出、嫌だという意味表示など、多様な場面で認められるとともに、「アンヤ」を発する場面によってその声の調子は明らかに異なって響くことにも治療者は気づいた。このような彼の一見常同反復的な「アンヤ」という発語が使われる場面によって異なっていたので、筆者は彼がその時相手に何を主張しようとしているのかを、両親に代弁するようにして伝えるように努めた。

やがて両親は、A男の「アンヤ」の発語に対して、場面に合わせて「それはイヤだったのね。ごめんね」などと、その時のA男の気持ちを適切に感じとって応答することができるようになっていった。

するとまもなく、A男は「アンヤ」を連発させる代わりに、私たちにも理解可能なことばらしい発話をするようになり、嫌だと感じたら「イヤ」と言い、母親には「マンマー」、相手に同意を求めるときには「ネー」と言うまでになっていった。このように少しずつであるが、ことばを用いて自己主張することができるようになっていった。

ていった。

事例の考察

a) 接近・回避動因的葛藤の悪循環による関係障害と介入

A男にも接近・回避動因的葛藤の存在がはっきりとみとめられていた。そのため潜在的には強い愛着欲求があるにもかかわらず、両親の接近に対して回避的行動をとっていた。このような悪循環は、両親に焦燥感をもたらし、A男が両親に近づきたい素振りを見せると、両親は彼に遊びをひとりややってごらんと促したり、彼には難しいような遊びに誘うなど、親子間の関係障害の悪循環によって、子どもは両親に構ってもらいたい様子なのに、子どもが接近すると突き放すような関わりをもってしまっていた。その結果、彼がひとりで遊んでいると、今度は両親の方からやや強引に他の遊びに誘ってしまうのであった。

この悪循環を断ち切るために、われわれは両親に対し、まず子どもが何を望んでいるか、それを感じ取って応答するように心がけようと助言した。まもなく両親の焦燥感が薄らぎ、先に述べたような親子間での好ましい愛着関係が生まれている。

b) 繰り返し言動にみられる多様性

やがてA男の遊びに興味深い現象が認められるようになった。クルクルスロープを使った遊びに、彼なりのさまざまな工夫が見られるようになってきているのである。一見常同反復的にしか見えなかった彼の遊びを見ていると、好奇心の高まりによって多様な関心が生まれているのがわかる。

さらに驚いたことには、盛んに発語がみられるようになってきたが、その発語「アンヤ」という一見常同反復的にしか聞こえないようなことばをさまざまな場面で繰り返すのであった。その同じようなことばが、使われる場面によって実に多様な意味を帯びていることも分かってきた。つまり一見すると常同反復的なことばにみえても、それには多様な意味が含まれていた。行動面に限らず、発語においても、その多様性

が認められるようになっていく。

c) 愛着形成の有無と繰り返し言動の質的変容
なぜA男の言動にこのような劇的な変化が起こったのであろうか。日頃指摘されている自閉症にみられる常同反復的行動¹⁾すべてにこのような多様性、多義性が隠されているということではないであろう。治療介入前の常同反復的行動とはその色彩には大きな相違が認められる。A男の好奇心が広がるとともに、情動の変化が発声や発語に如実に反映していることがうかがわれる。おそらく、情動的コミュニケーションの成否を決定づけるほどに重要な意味をもつ愛着形成が母子間でもたらされた結果の産物であろうと筆者には思われる。

d) 「安全感/非安全感」と「変化/不変」

子どもたちは養育者との間に愛着関係を結び、そこでの基本的信頼感を獲得することによって、初めて社会的に広がりをもつ世界へと羽ばたいていくことが可能になる。もし愛着形成不全によって安全感のない心理状態(非安全感)にある場合には、周囲への警戒心が強まり、環境世界のごくわずかな変化にも強い不安を示し、不変を求めようになる。自閉症にみられる同一性保持や、常同反復のないし強迫的行動は、主にこのような安全感の乏しさ故に必然的にもたらされた自分なりに安定を求めようとする行動であろうと思われるのである。

治療介入後、母子間の愛着関係が深まってきたことによって、初めてA男に安全感が育まれていったが、安全感によって好奇心が旺盛になり、環境世界の変化が彼の好奇心を一層膨らませるようになっていったのであろう。同じような繰り返しに見えることばに孕まれた多様性や多義性は、情動的コミュニケーションの成立によって初めて生まれた現象であろうと考えられるのである。

1) 本稿で、常同反復的行動は、従来の自閉症にみられる強迫性を伴った病理的なものを指し、繰り返し行動は愛着形成後に認められる多様性を帯びたものとして区別して論じている。

e) 繰り返し言動の多様性と映し返し

すでに他の機会(小林, 2002a; 小林, 2002b)で論じたように、対象や事象のもつ意味は、客観的一義的に決定されているものではない。対象や事象のもつ多様な属性に対して、どのように関心を向けるか、その様相によって意味するものは変容していく。つまりは文脈によって多義的な意味を持っている。とするならば、ある対象に子どもがどのような関心、注意、気持ちを向けているか、それを感じ取りながらことばを掛けるということが、われわれのことばかけにおいて必要不可欠であることがわかる。同じことの繰り返しにしかすぎないようにみえる言動に対して、私たちがことば文化を用いてどのように切り分けるかによって、私たちのことばが子どもに力を与えるものになるか、それとも彼らを振り回すものになるか、そのことを決定づけるほどの重みを持っている。表層的には同じことの繰り返しまみえる言動に孕まれた多様性に養育者が柔軟に対応することが可能になれば、子どものことば世界は次第に豊かになっていくとともに、ことばが子どもにとって自我を補強してくれるような力ともなっていくと思われるのである。

2. 関係障害臨床からみた主体と客体の関係—主客転倒は個の病理的現象か—

主体と客体の関係が混乱して、本来ならば相手(客体)のいうべきせりふと、自分(主体)のいうべきせりふが転倒してしまう現象で、代名詞の転倒 pronominal reversal (Kanner, 1946)ともいわれている。Kanner が取り上げて以来、今日まで自閉症の言語発達病理の特徴のひとつとして診断的価値をも担っている (American Psychiatric Association, 1994; World Health Organization, 1992)。

これまで自閉症の言語特徴が、われわれの言語機能を基準にして比較評価され、われわれの通常の言語表現からあまりにも偏っているために、病理的とみなされてきたのであるが、愛着形成を基盤とした情動的コミュニケーションに

焦点を当てた関係障害臨床の視点に立つと、このような言語発達病理現象とみなされてきた特徴にまったく異なった一面が浮き彫りになってくる。

事例 B男 治療開始時4歳11カ月

〈知的発達水準〉DQ83 (津守式発達検査) 境界域精神遅滞

〈発達歴〉幼児期早期、一時的に多動になったことはあったが、数年で落ち着いた。ただ、自宅近くの塀の模様を流し目で眺めて楽しんだり、落ち葉を眺めたり、砂を手にとってさらさら砂が落ちるのに魅入るといふ、独特な視知覚行動が早くから認められていた。

母親はこれまでB男のしつけにとても神経を使い、彼の仕草ひとつひとつ事細かく注意してきた。B男はこれまで母親に反抗的になることもかんしゃくを起こすことも少なく、比較的従順に母親の指示に従ってきた。まもなくB男はいつも母親の顔色をうかがいながら行動することがとても目に付くようになった。ただ、最近になって少しずつ母親の言いつけに対して物を投げて怒りの反応を示すようになっていた。その頃 MIU での治療が開始された。

〈治療経過〉治療では、母親の先取りの関与やことばでの指示が多いことを取り上げながら、少しずつ子どもの動きに沿った対応ができるように助言していった。

2カ月もすると、B男は慣れない場面になるととても怖がるようになり、母親に相手をしてもらいたがるようになった。明らかに愛着欲求が高まってきたことをうかがわせるものであった。花火大会に連れていったら、花火の音を聞いてとても恐がったが、母親はその時、すぐに家に帰ってしまうと、これがきっかけでどこにも行きたがらなくなるのではないかと心配したという。ブドウ狩りに連れていった時にも、房の棚の奥の薄暗がりを見て怖がりだした。そして母親に「ダッコ、アマエンボウ(抱っこ、甘えん坊)」と自分で言いながら抱っこを要求した。母親は抱いてやった方がいいかどうか迷って、ずっとB男の手だけを握って相手をしてい

たという。このように母親には、子どもの今の気持ちを頭では分かっているつもりでも、甘えたり、怖がったりすることをどうしても否定的に捉えがちで、ありのままに受け止めることは困難な状態であった。そんな母子関係の特徴はさほどの変化も見せず、9カ月経過した頃のことであった。

B男はMIUで自発的に活発に遊ぶようになっていた。それに合わせて母親も彼の動きに合わせて一見楽しそうに振る舞っていた。しかし、母親は本心から楽しむことはできず、実際はいつもしんどい思いを感じながらつき合っていることが母親の語りの中でわかった。そんな中で、B男は遊んでいる最中に、足をひねって痛い思いをすると、B男自身の方から思わず「ゴメンナサイ」と発するのだった。このようなことばの使い方は、家庭でもよくみられていた。他児がころんで泣いていても、それをみて「ゴメンナサイ」、園の先生がくしゃみをする、すぐにそばに寄ってきて、「ダイジョウブ?」「ゴメンナサイ」。弟が叱られていると、彼の方が「ゴメンナサイ」といって謝るのだった。母親が足を痛めると、そばによって足を触りながら「ゴメンナサイ」「ダイジョウブ」と言い、自分でひざをすりむいても「ゴメンナサイ」と言っていた。ただ、これらの同じ「ゴメンナサイ」のせりふも、各々の文脈によって、微妙にその声の調子が異なっていて、彼が本当は何を言おうとしているか、母親はほとんど聞き分けることができるとも語るのだった。

同じ頃のあるセッションでのエピソードである。B男が鉢を左右の手に持って、交互に鉄琴を叩いていた拍子に、自分の目に当たってしまった。その時、B男は痛そうな反応を見せたが、母親はそれを見て思わず自分から「ごめんなさい」と発した。母親のこの時の反応には筆者は少なからず驚かされた。子どもが痛そうな体験をしたのであるから、「痛かったでしょ、だいじょうぶ?」などと言って子どもの状態を案じるのが通常の反応であろうが、母親は思わず「ごめんなさい」と言ってしまったのである。

またある時、B男が樽の中に入って、母親に樽の上にポールを乗せてもらって、母親とB男とのあいだでポールのやりとりが繰り返されていた。一緒に来ていた弟がそばで共同治療者と必死になって遊んでいた拍子に、つい興奮してしまい、自分のスリッパを放り投げ、あわや共同治療者に当たりそうになったのである。それに気づいた母親は思わず「ごめんなさい」と応答していた。先のような母親の発言は決して珍しいものではなかったのである。

事例の考察

a) 周囲への気遣いが強い母親

母親が思わず発したこのせりふに端的に示されているのは、いかに母親が日頃から過剰なほどに周囲に気遣っているかということである。たしかに子どもの行動に対していつも敏感に反応していたが、子どものことが心配であったこともさることながら、周囲への強い気遣いがあったことは、日頃からの母親の近所づきあいの苦勞からもうかがわれた。母親の子どもや周囲への過剰なほどの気遣いは、B男が自閉症であるということの不安から来ていることも確かであろうが、筆者からみてB男の行動が目に見えて分かりやすくなってきたにもかかわらず、依然として同じ様な態度をとっている母親の気遣いは容易には軽減しそうにないように思われたのである。

b) いつも母親の顔色をうかがって行動する

B男も何かが起こると、自分ではどうしてよいかとても困惑していた。いつも母親の顔色をうかがいながら行動している。筆者には、周囲への気遣いが強い母親の姿と、B男がいつも母親の顔色をうかがいながら行動している姿が重なり合って映ってしまうほどであった。

c) 子どもの不安と母親参照

治療介入後まもなく、次第にB男の母親への愛着欲求は高まり、あきらかに母親に甘えるようになってきていた。しかし、母親は素直に子どもの欲求を受け止めることができない。どうすればよいのか、頭で懸命になって考え、いつも不自然な行動を取ってしまっていた。このよ

うな母子関係が続いていたので、B男は愛着欲求が満たされず、いつも母親が自分を受け入れてくれるかどうかを気にしながら振る舞っていた。このような状態にあると、いよいよ心細くなり、愛着欲求は高まり、その一方で欲求を抑えなくてはならないという気持ちも強まる。心細いにも関わらず愛着欲求が満たされない。すると、母親の顔色をうかがう行動がより一層強まってしまう。母親参照行動によって判断の拠り所を見出さずことができないうために、どのように行動してよいかわからないという状況に置かれてしまう。関係障害の悪循環がどんどん進展してゆくことになるのである。

d) 母親の思わず発したことば「ごめんなさい」

しかし、治療開始後しばらくすると、B男は何事に対しても母親に対して、「いやだ」「やめて」とさかんに自己主張するようになっていた。そのことが、この母親にはより一層養育にまつわる不安を強めることになったのかもしれない。ここで考えてみたいのは、母親の思わず発したこのようなことばの使い方には、重要な意味が隠されていることである。

B男は明らかに自分のせいで「痛い」思いを体験したのであるが、まさにその最中に、実にタイミングよく母親が発した「ごめんなさい」ということばは、B男にはどのように体験されて記憶されていたのであろうか。なぜ「痛かったね」などといった子どもの「いま、ここで」の体験にふさわしいことばを投げかけることができなかつたのであろうか。

e) 先取りの関与と周囲への過度な気遣い

ひとつには、B男が幼児期早期に多動であったために、どうしても先取りの関与をしがちになり、そのことが現在もなおその傾向を残すことになったことは確かであったが、母親には過剰なほどの周囲への気遣いが目立っていることが一際目を引いていた。今日のわが国の文化的背景を考えると、このような傾向はけっして珍しいこととはいえない。よって、このような母親の関与のあり方そのものを直ちに個人の病理と決めつけることはできない。ここに問題の深

刻さがあるのである。

f) 母親の注意、関心がいつも周囲に向かって
いる

ただ、自閉症の子どものように、自分の情動体験とことばとが体験的に学習しがたい特徴をもつ子どもに対して、この母親のような関与が常日頃から行われていると、子どもにとってことば刺激がどのような体験として蓄積されていくかを検討する必要がある。

母親は子どもに対してとても神経を使っていることはそばにいてよく分かったが、それと同時にあまりにも周囲への気遣いが強すぎるために、母親の注意や関心は子どもの方にしっかりと注がれず、子どもの方からすると、見守られているという心地よい体験とはなっていないだろうと思われる。母親はいわゆる「気が散る」状態にあって、子どもの心の動きに沿って注意や関心をともにするという関わりを持つことは困難であったということができるのである。

g) 情動的コミュニケーションの破綻と主客転倒

このようにみえてくると、主客転倒という言語発達病理が、心の理論障害(Baron-Cohen, 1988)という子どもの側能力障害という側面から理解することはできないことが分かる。子どもと養育者とのあいだで情動的コミュニケーションが破綻している関係、つまりは愛着関係が成立していない場合には、養育者は子どもの気持ちに成り込む(鯨岡, 1997)ということではできないのは確かであるが、けっしてそれだけではないところに関係障害の悪循環のもたらす病理の深刻さを見出すことができる。それは何かといえば、接近・回避動因的葛藤の悪循環からも分かるように、子どもは養育者とのあいだで回避的態度をとりつつも、内心では接近したいという気持ちを常に持ち続けている。つまりは、子どもは養育者に甘えたい、養育者の行動を取り入れたいという思いも合わせ持っている。人間が本来的にもつ根源的な両義性である(鯨岡, 1998)。したがって情動的コミュニケーション、つまりは両者のあいだで情動水準の体験の共有が不可能であるにもかかわらず、

養育者の行動を子どもは自分の体験の中で意味づけ取り入れようとするようになる。ここに主客転倒の言語発達病理がもたらされる大きな要因があるのではないかと筆者には思われる。関係障害の結果の一表現型としての子どもの言語活動とみなすことができるのである。

Ⅲ. 全体の考察

一 幼児期自閉症のこぼの成り立ちについて一

1. 子どもの発することば（発声）と養育者の表象

本稿で提示された2事例において、幼児期自閉症の子どもにみられることばが、母子の関係性の質にいかほど大きく規定されているかがよく示されている。いまだことばとして十分な象徴機能を有していない段階において、自閉症児の発することば（あるいは発声）のもつ意味は、その用いられた文脈に強く規定されていることがわかる。

最初は未だ有意語とはなっていない曖昧な発声段階から、しだいに養育者のことばの一部を取り入れながら、多様な文脈の中で用いられるようになっていくことが、本稿のA男の事例に示されている。ここでわれわれがまずもって取り上げなくてはならないことは、自閉症児（こども）が発することばや発声が、最初は明確な一般的意味をもつことば（有意語）として生まれ出るのでなく、極めて曖昧で不定形な発声や繰り返すことばの形で表現されていることである。それを受け止めるわれわれ（養育者や治療者）がそれに対してどのような表象を思い浮かべるか、そしてそれを子どもにどのように映し返していくかということが決定的ともいえるほどに重要だということである。

2. 情動的コミュニケーションと映し返し

いまだことばを対等に用いたコミュニケーションが成立しない子どもや、まったく話しことばをもたない子どもとのコミュニケーションを考える際に、このことは非常に重要な意味をもつ。それはなにかといえば、この過渡的段階で

の表現形態が情動的コミュニケーションに大きく依存したコミュニケーション形態のもとで繰り広げられているということである。よって、情動的コミュニケーションの成立が不可欠なのである。情動的コミュニケーションの世界においては、子どもの発することばや声がわれわれの心に共鳴し、われわれの心の中にある表象が想起される。そのようなわれわれの思い描く内的表象を通して、われわれは子どもに映し返していく。このような対人交流を通して、子どもたちは自分の思い、気持ちなどの（文化的）意味的世界を初めて分かち合うことが可能になっていくと考えることができよう。

以上、子どもの心の動きをわれわれが感じ取りながら、そこでわれわれの中に浮かんできたことば文化でもって映し返すことの重要性が示されているが、このことは、子どもの動因、意図、気持ちに焦点を当てたわれわれの関与の重要性を示しているといえよう（小林, 2002a）。

3. 関係障害における意識と体験の乖離

事例Bで示された一見主客転倒のようにみえる自閉症児のこぼが、関係障害臨床の視点に立つと、まったく異なった様相でもって浮かび上がってくることがわかる。自閉症児がその場で養育者から発せられたことばを彼なりに取り入れているのではないかと推測されるのである。

子どもが「今、ここで」体験していることを、われわれがことばによって適切に表現するということは、さほど容易なことではない。ある対象を前にして、子どもにその対象の持つ意味を教えるためには、子どもがその対象のどのような属性に着目しているか、その対象にどのように関わっているか、といったことを共有した上でなければ、その対象の「今、ここで」の意味、つまりは文脈によって規定された対象のもつ意味を子どもに的確に提示することはできない（小林, 2002b）。このことはけっして具体的な対象物の場合のみならず、子どもが対人交流の中で時々刻々体験しているあらゆる事象におい

ても当てはまることである。

B男においては、養育者が子どもの気持ちに成り込むことが困難であったがために、一見子どもと行動を共にしているように見えても、養育者の注意や関心の多くは対他的配慮に注がれてしまい、体験の共有は困難な状態にあった。しかし、このような関係にあっても、B男は環境世界の意味を映し出してくれる人として母親を求めていたがために、B男は意識と体験の乖離した状態にあっても、養育者の内的表象に映し出された世界を彼なりに取り入れざるをえなかったのであろう。

4. 養育者の果たす役割—養育者の成り込み—

事例B男の養育者は強い対他的配慮のために、子どもの「いま、ここで」体験していることに沿ったふさわしいことばを発することができていない。そのことが事例B男の主客転倒とも思われる言語の使用に示されている。このことは、逆に養育者が子どもの「いま、ここで」の気持ちに成り込み(鯨岡, 1997)そこで思わず発することばが、子どものことばの獲得過程において、きわめて重要な意味を持つことを教えてくれているように思われる。そこにおいては、養育者は子どもの気持ちに成り込むという育児過程における独特な子どもへの関わり的重要性が示されている。

5. 自閉症児のことばと関係障害臨床

これまで自閉症に限らず発達障害のコミュニケーション指導として、われわれが通常用いるようなことば、好ましい表現の獲得を目指すという方針がとられがちであった。そのような考え方の背景には、個体能力論的発達観が大きく影響していたことは疑いのないところであらう。

本来、コミュニケーション発達は、子どもの中の閉じられた関係の中で展開していくものではなく、常に開かれた関係の中で展開され、その中で子どもは暗黙のうちにことばを獲得していくものなのであろう。この点で、今回本稿で

取り上げた関係発達論的なことばの成り立ちをみていくと、われわれ子どもを養育する者の果たす役割がいかに重要な意味を帯びているか、痛感させられる。

さらに忘れてはならないのは、われわれの望ましい役割が可能になるのは、子どもとの情動的コミュニケーションがしっかりと成立していることが不可欠だということである。すなわち、愛着形成に基づく母子コミュニケーションの果たす役割の重要性である。関係障害臨床において、愛着をめぐる葛藤に対する介入を治療の当初のもっとも重要な目標とみなしているのは、このような理由によるのである。

これまでの検討から、子どもたちの言語認知機能の発達過程における養育者の果たす役割の大きさを改めて思い知らされる。生誕後、ヒトから人間になっていく過程において、とりわけ乳幼児期早期の養育者の果たす役割の大きさは、今更強調することもないが、自閉症に関する原因や治療を論じる際には、養育者の存在に対してことさら過敏であったように思う。それは心因論のもたらした弊害ともいえようが、子どもを養育するという営みは、自閉症といわれる子どもにおいても本質的に大きな違いはないのであろう。ただ、彼らの養育は、他の子どもたちでは体験できないほどの多くの困難さを伴うことは確かである。よって、彼らへの取り組みを通して、対人関係がいかに複雑な要因によって成り立っているか、われわれは多くのことを学ぶ必要がある。そして、子どもの言語認知発達が、養育者とのコミュニケーションの展開の中で繰り広げられる過程の中でいかにして成立していくのか、その詳細な検討が求められている。

IV. おわりに

これまでの自閉症の言語認知障害研究を批判的に捉える中で、筆者は関係障害臨床の視点から自閉症のことばの成り立ちについて検討を試みた。第1部で青年期・成人期自閉症にみられる特異な言語発達病理現象とみなされてきた遅

延性反響言語、隠喩的表現、字義通り性を取り上げながら、それらの表現形態は、けっして病理的という一面的な捉え方をすることはできず、コミュニケーションの発達過程からみていくと、必然的な性質をもつものであることを主張した。

第2部の本稿では自閉症の幼児期にみられることばの特徴を取り上げながら、従来指摘されてきた自閉症の特異な言語発達像は、けっして自閉症特異的なものではなく、コミュニケーション発達過程において、いわば必然的に認められる現象であることを、表層的にみると常同反復的行動や主客転倒に見える例を通して述べた。また、そこにおいてわれわれの関与のあり方が、自閉症の人々のその後の言語発達過程に大きな影響を及ぼす可能性について論じた。

さらに、自閉症児の言語発達を関係発達論的観点から捉えることによって、彼らのことばを、言語発達病理像とみなす視点を越えて、建設的なコミュニケーション発達の一過程としての言語発達の特徴として描き出した。

最後に、以下の3点を強調して本論を締めくくることにしよう。まずは、これまでの自閉症研究は、あまりにも言語認知障害に焦点が当たられ、多くの生物学的研究の知見との関連でもって捉えられてきたが、関係障害臨床の立場からみていくと、言語認知機能そのものに本質的な障害が生来的に存在するのではなく、その背景にはコミュニケーション、すなわち対人交流（対人関係）そのものに対する彼ら独特の困難さ、あるいは敏感さがあるのではないかということである。したがって、彼らへの臨床的援助は、関係そのものに焦点を当てた枠組みが最も重要であること、そのためには養育者のみならず彼らにかかわるすべての人々のあり方を視野に入れながら検討していく必要がある。このことは、けっしてわれわれの関わり方が自閉症の臨床像をもたらすといった短絡的で直線的な因果関係を意味するのではなく、すべての対人事象は、他者との関係性の中に開かれ、相互に規定されながら、日々営まれているという厳然た

る事実を再確認することの必要性を改めて再認識しなければならないということの意味している。

これまで自閉症の言語認知障害研究は、近代科学が信奉する客観性を重んじるばかりに、本来生きものとしてのことばを、関係性や文脈と切り離れた形でもって採り上げてきたといつてよい。松本・辻野(2002)のいうように、従来の科学は死に物の現象に関する科学であったとするならば、今こそわれわれは、生き物の科学を志向していくための新たなパラダイムを求めていかなければならないのではなかろうか。

呈示した事例はすべて MIU での治療例である。MIU のスタッフ全員に心より感謝申し上げる。その中でもとりわけ小林広英氏(前東海大学大学院健康科学研究科保健福祉学専攻、現茅ヶ崎リハビリテーション専門学校講師)の協力が大きかった。

本論(第1部～第2部)をまとめる過程で、鯨岡 峻氏(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)との討論から多くの示唆を得た。また、村田豊久氏(西南学院大学社会福祉学科教授)および十一元三氏(Case Western Reserve University/ University Hospitals of Cleveland)には初稿に対して忌憚のない意見をいただいた。各氏に対して改めてお礼申し上げたいと思う。

文 献

- American Psychiatric Association. (1994): *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.)*. Washington DC, American Psychiatric Association.
- Baron-Cohen, S. (1988): Social and pragmatic deficits in autism: Cognitive or affective? *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 18, 379-402.
- Kanner, L. (1946): Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. *American Journal of Psychiatry*, 103, 242-246.
- 小林隆児(2000a): 自閉症の関係障害臨床一母と子のあいだを治療する一。京都, ミネルヴァ書房。
- 小林隆児(2002): 自閉症一学童期・青年期一。山崎晃

- 資, 牛島定信, 栗田広他 (編) 最新児童青年精神医学 (pp. 117-126). 東京, 永井書店.
- 小林隆児 (2002b): 見立てと介入. 乳幼児医学・心理学研究, 11, 27-34.
- 小林隆児 (2003): 自閉症のこぼの成り立ちを考える (第1部) 青年期・成人期編. 児童青年精神医学とその近接領域, 44, 16-37.
- 鯨岡 峻 (1997): 原初的コミュニケーションの諸相. 京都, ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 (1998): 両義性の発達心理学. 京都, ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 (2001): 個体能力論的発達観と関係論的発達観. 発達, 86, 17-24.
- 松本元・辻野広司 (2002): 脳のこころ. 松本元・小野武年 (編): 情と意の脳科学一人とは何か (pp. 218-279). 東京, 培風館.
- World Health Organization (1992): *The ICD-10 classification of mental and behavioural disorders*. Geneva, World Health Organization. (融道男, 中根允文, 小見山実監訳 (1993): ICD-10: 精神および行動の障害. 東京, 医学書院.)

ON ETIOLOGY OF LANGUAGE DEVELOPMENT IN AUTISM : PART 2. INFANCY

Ryuji KOBAYASHI, M. D., Ph. D.

Department of Social Work, School of Health Sciences, Tokai University

The development of language in the autistic is discussed from the standpoint of clinical intervention for interpersonal relationships, through critical appraisal of studies on disturbances in language cognition in autism to date. In this paper, Part 2, phenomena commonly regarded as the characteristics of language among autistics in infancy, such as repetitive expression and reversal pronoun are reviewed. In the process, it is shown how the picture of language development long indicated as being peculiar to autism is in fact not specific to the disorder, but is a de facto natural phenomenon within the course of communication development. Upon this understanding, the possibility of the content of our intervention in the developmental stage having large influence on the subsequent course of language development in the autistic individual is discussed. Additionally, their language is portrayed as characteristics of language development, in the context of their being a transitional phase in

the development of constructive communication, transcending the perspective of their being pathological pictures in language development by capturing the language development of the autistic child from the standpoint of relational development. Finally, pointing out that the studies on language cognition disturbances in autism to date have dealt with language — a living entity to start with — severed from its relativity and context, the author emphasizes the need to break away from such conventional study of inanimate phenomenon in search of a new paradigm for approaching the phenomenon as a living science.

Author's Address:
R. KOBAYASHI
Department of Social Work,
School of Health Sciences,
Tokai University
Boseidai, Isehara,
Kanagawa 259-1193, JAPAN